
変わらない日常

蒼き庭師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わらない日常

【コード】

N9930N

【作者名】

蒼き庭師

【あらすじ】

変わらない日常に退屈していた主人公。変わることを願い、変えようとする勇気がなかった。しかしたった1人の少女との出会いによって動き出したのは戦いの日常。終わらせるためには9人いるドールと呼ばれる少女達を殺し契約した少女を完成させること。裏切りや混乱、絶望の中で主人公とそのドールはなにをするのか。完全を作るための禁断のゲーム「Blood」。ただ今より開始します

日常

何も変わらない毎日は退屈なものだ。朝、目を覚まし学校へ行き授業を受け、部活がおわれれば家に帰り寝る。毎日が変化なく進んでいく。俺はそんな毎日が嫌いだ。だけど、自分から何かを変える勇氣はない。嫌いな毎日を過ごし生きていくのだと諦めていた。彼女達と会うまでは……

「じゃあ、行ってくるよ」

不気味なほど家のなかに響いた声に返事はない。一人暮らしを始めから数ヶ月たち、それにも今では慣れた。二年近く通い慣れた道を通り学校へ行く。何も変わらない毎日の始まりだ

「おはよう、シー君」

いつもどおりの時間にいつもどおりの場所で俺を待っていたのは幼なじみの園宮 明日奈。成績はいいが運動は苦手で、綺麗というよりは可愛いに入る顔立ち、それに誰にでもやさしい性格から学年のアイドル的存在になっている

「明日奈、毎日毎日待ってて本当に飽きないんだな」

「幼なじみと学校に行くのが恥ずかしいのかな？」

不敵な笑みを浮かべながらこちらの顔を覗き込んでくる

「はぁ……。なんでこんな性格悪いやつになったんだか」

これが園宮明日奈の本性である。10年近くの年月で明日奈の頭に蓄積された俺の弱みは凄まじく何か自分の気に食わないことがあるばすぐに弱みをついてくる

「そう言えば今日、転校生が来るんだって」

唐突に明日奈がそんな話を持ち出してきた

「へえ…。男子なら女子が女子なら男子がつるさくなるな」

「むさい奴らがつるさくなる女子が転校生してくるみたい。先生たちは外国人って言ってたよ」

「外国人がこんな田舎にねえ……」

転校生のことにはあまり興味が無くただ明日奈の話ブーツと聞くだけだった。本当にブーツと歩いていたので、

「キヤツ!?!」

「痛ツ!?!」

周りすら見えてなかったのでたまたま角から出てきた人とぶつかってしまう

「シー君はほつといて君、大丈夫?」

「最初のは余計だろ……」

相手にツッコみつつぶつかつた相手が心配になり起き上がる

「いたたあ……」

相手は学校では小柄な方の明日奈より更に小柄で髪は赤みがかつた茶髪。さらに俺たちと同じ制服を着ている

「ごめん、少しボーツとしてて……。大丈夫か？」

「は、はい。怪我也擦り傷ぐらいいですし。こちらこそ前見てなかったのが悪いですから」

二人とも謝ると明日奈が横から入ってくる

「この馬鹿がボーツとしててごめんね。私は園宮明日奈。多分君と同じ学校の生徒だよ」

「ぼ、僕は速見 蒼って言います」

慌てても礼儀正しく礼をしながら挨拶する

「俺は……」こっちの馬鹿はシー君って言っただよ」「……お前な……」

「シーさんって言っんですか。よろしくお願いします」

「俺はシーじゃなくてし……」よろしくね、蒼ちゃん「……」

ことごとく自己紹介を潰されもう諦める

「あつてすぐに悪いんだけど私たち日直だから早く行かないとダメなんだ。だから先行くね」

「わ、分かりました」

先に走りだす明日奈

「さっきのは本当にごめんな。こんど絶対埋め合わせするから」

俺も明日奈を追いかけ走りだす。まさかこんな出会いが切っ掛けであんな戦いに巻き込まれるなんてその時は思いもしなかった

始まり

「おはよう……」

いつもどおりやる気のない挨拶をして教室に入っていく

「シー、今日転校生がくるんだってよ」

「さっき明日奈から聞いたから知ってる」

素っ気なくやり過ごして席に向かう。後ろからは「やっぱり付き合ってるんだ」とか「同棲してるんだよ」とかどうでもいい事ばかり聞こえてくる

「はぁ……、めんどくせ……」

「朝からため息なんてついてると馬鹿になるぞ？」

「お前見てるほうが馬鹿になる」

いきなり目の前に湧いて出てきたのはかなり不本意だが明日奈と同じく幼なじみの工藤 拓武。勉強はてんでダメだが頭を使わないスポーツならなんでもござれの脳筋馬鹿だ

「何時も通り頭に来る奴だな、お前は」

「何時も通りでなによりだろ？」

馬鹿なことを言ってるうちに担任が来たようだ。工藤含む男子達は

驚くべき瞬発力を発揮し席に着く。ほんとに無駄だな

「な、なんだ、男子達は無駄に気合いはいつてるな」

「「「転校生が女子なんですから当たり前です!!」「」」

(男子共、女子がドン引きしてるぞ……)

口にするのも面倒になるくらい男子陣は気合いが入っているようなので黙っておく

「そ、そうか……。じゃあ入ってこい、速見」

「は、はい………」

(ん？速見?)

その名前を聞いた瞬間、何かが確定した気がした

「ぼ、僕は速見 蒼って言います……。その……。よ、よろしくお願ひします……」

最後の方は消え入りそうなほどに小さくなってたがそれが男子陣の起爆剤になったようで……

「「「外国人の僕っ娘、キタコレ!!」「」」

完全にアホの集まりだと再認識させられた瞬間だった。女子陣と担任は固まっているし蒼にいたってはしゃがんで震えている。何か黙らす物はないかと探しているうちに……

「……………シーさん？」

なぜか無駄にその言葉だけが教室中に響き渡り男子達の鎮静剤となる

「さ、さっきぶりだな、速見……………」

引きつった笑みを浮かべながら一応挨拶だけはしておく。ちょうど真ん中辺りの席なので周りからの殺気がもの凄く痛い

「な、なんだ、お前と速見は知り合いだったのか。な、なら後は任せるぞ」

そう言っつて勝手にホームルームを終わらせ出ていく担任

(に、逃げたああ!!)

内心叫びつつ自らも逃げようとするが、

「……………シイイイー!! お前つて奴はああ!!」「……………」

バイオハザードのゾンビかって思うほどの勢いで手を伸ばしながら掴み掛かるうと群がってくる

(さっきのあれは死亡フラグが確定したのか……………)

そんなことを無駄に考えながら体育館裏に連れていかれたのであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9930n/>

変わらない日常

2010年10月11日02時44分発行